

目 次

- ・ 2000年度関東地区第2回研究例会報告
ドイツ図書館界の動向—ドイツ図書館研究所(DBI)の廃止を中心に—
(三浦太郎)
転換期における大学図書館運営—専任・専門職館長の意義—(宮部頼子)
- ・ 2000年度図書館文化史研究会 第17回研究集会報告
- ・ 天満隆之輔さんの思い出 (田澤恭二)
- ・ 2001年度第18回日本図書館文化史研究会研究集会及び総会
— お知らせと発表者募集 —
- ・ 関東地区研究例会のお知らせ
- ・ 会員動向
- ・ 事務局から

ドイツ図書館界の動向—ドイツ図書館研究所(DBI)の廃止を中心に—
三浦 太郎

(東京大学大学院教育学研究科)

ドイツ連邦共和国の行政では、連邦政府が16州に行政権限を移譲する形態が一般的であり、文化関連の施策は州政府が責任を負っている。そのうち図書館に関する施策の大部分は市町村が権限を受けており、連邦レベルで図書館法のような法規体系は存在しない。ドイツにおける情報政策の中に確固たる位置づけを得ているのは、(1)ドイツ図書館(Die Deutsche Bibliothek: DDB)など国立図書館、(2)ハノーヴァー大学技術情報図書館(Technische Informationsbibliothek: TIB)など4館の主題専門図書館、(3)大学図書館であり、これらは学術図書館(wissenschaftlichen Bibliotheken)の範疇に含まれる。学術図書館と対照的に、国内に12,000館以上を数える公共図書館(Oeffentliche Bibliotheken)はいわば分散的に存在している。

旧西ドイツの図書館制度の中で調整機関的な役割を担ったのが、ドイツ図書館研究所(Deutsche Bibliotheksinstitut: DBI)である。DBIは1978年にふたつの機関を統合して創設された。すなわち、1958年にドイツ図書館協会(Deutsche Bibliotheksverein: DBV)のもとに設置された図書館制度調整団体と、1963年にアメリカの支援プログラムによって設立された国際交流委員会を合わせて、DBIは設立されたのである。DBIは連邦と州が70%、30%の比率で出資する公的機関であった。DBIの運営を決定したのは評議会と諮問委員会である。評議会は16州の代表と連邦政府の大臣で構成

されており、予算決定の権限を持っていた。また、諮問委員会は DBV などの図書館界の代表者で構成され、館界の動向を反映した。DBI の主要な使命は、(1)蔵書構築や管理運営面で国内の図書館に対して助言すること、(2)機械可読総合目録 (Verbundkatalog maschinenlesbarer Daten: VK) の管理、(3)雑誌データベース (Zeitschriftendatenbank: ZDB) の構築、(4)文献提供プロジェクト SUBITO の実現、(5)他国と図書館員との交換留学や国際協力セミナーを組織すること、であった。

1990年に東西ドイツが統一されると、旧東ドイツに存在した類似の機関(図書館サービス中央研究所と図書館組織センター)が DBI に併合されてその展開が図られた。しかし、財政的な逼迫状況下で既存の機関の存廃が議論に上った際に DBI も整理対象となり、1998年に閉鎖が決定された。2000年1月には DBI 法が失効し、現在、ベルリン州政府の学術・研究・文化局のもとに「旧 DBI (Ehemaliges DBI)」が置かれて、2003年を目途に残務整理が続けられている。DBI で行われていたサービスのうち主要なものは他の機関へ引き継がれており、DBI のサービスはいわばスリム化したかたちで継承されることとなった。

なお発表者は1999年3月、『ドイツ連邦共和国における図書館制度の概略』を翻訳した。これは Hnas-Peter Thun Eine Einfuhrung in das Bibliothekswesen der Bundesrepublik Deutschland 1995, Deutsche Bibliotheksinstitut の英語訳をさらに日本語に訳したものである。関心の向きはご一報下されたい。

転換期における大学図書館運営 —専任・専門職館長の意義—

宮部 頼子

(白百合女子大学)

1. 転換期の要因

1) 情報技術の進展。2) 教育環境の変化。3) 研究環境の変化。4) 社会と大学の関係の変化。こうした状況で、改めて「図書館の専門性とは何か？」が問われている。先行研究は大学改革を扱ったものは多数あるが、大学図書館、特に大学図書館長の問題を正面から論じているものは少ない。

2. 米国における大学図書館長を巡る状況

ほぼ99%が専任・専門職館長。呼称は「図書館長」が一般的だが、最近は「図書館サービス部長」「教育研究／情報サービス副学長」などが増えている。これは学長との関わりを強調し、館長の威信を高めたり、管理職機構における図書館長の新たな位置づけを容易にするものと考えられる。多くの場合、教授のステータスを与えられ、一般事務機構からは独立し、一貫した責任体制を有しており、館長の責任と権限はきわめて大きい。反面、厳しい業務評価にも耐えねばならない。

3. 日本における大学図書館長を巡る状況

米国とは逆にほぼ99%が教授による兼任・非専門職館長。「非営利組織(大学図書館)における意思決定とリーダーシップの研究」(永田治樹)から大学図書館長の現況紹介。「大学図書館の管理運営—専門職専任館長の問題を巡って」(宮部頼子)

から館長兼任制および短期任期制の問題点を紹介。我が国でも大学図書館基準、私立大学図書館改善要綱で、図書館長は学部長と同等に重要視されなければならないと明記されている。現実には大学図書館長の学内における地位は国・公・私立を通じて相対的には低い。リーダーシップ、水先案内人、職員集団の取りまとめ等の大学図書館長の機能と在り方を根本から問う姿勢が、図書館内外において欠如。

4. 真の改革をもとめて(多面的アプローチが必要)

- 1) 専任・専門職館長実現の側面：大学図書館基準等を根拠に図書館現場から学内で主張。次善の策として、専門職副館長／館長補佐／事務長の確保。大学院修了者の現場進出促進。横断的で幅広い人材登用・プロモーションの実現。
- 2) 専門職員のレベルアップの側面：大学院レベルの管理職養成カリキュラムを充実。現職者の長期研修もしくは大学院進学への奨励・支援。専門職員としてのサービス実績強化と学内でのアピール。グレード制導入、夜間・通信制の大学院コース等が現実化の兆し。学長の図書館に対する理解が極めて重要。学長の理解と協力が得られるか否かがカギ。

5. 今後の課題

- 1) 我が国の大学教育改革全体の中での、図書館・図書館長の問題の位置づけ。
- 2) 大学基準成立過程における図書館長を巡る議論、特に米国教育使節団関係者の見解究明。
- 3) 各種基準類が骨抜きになってしまっている現状とその背景・要因の究明。

2000年度図書館文化史研究会 第17回研究集会報告

(第2日 テーマ発表；発表1および発表2(前号で掲載できなかった分))

発表1：(問題提起)図書館づくり運動の思想と実践—歴史的検討

山口 源治郎

(東京学芸大学)

現代の図書館が様々な意味で転換期にあることは改めていうまでもない。このシンポジウムは、図書館づくり運動という視点からこの転換期に歴史的検討を加えることを目的としている。その際大正期と1970年代という日本における図書館づくり運動において特徴的な二つの時期に焦点付けてみようと思う。

まず戦前期における図書館づくりを取り上げる時、二つのベクトルからの図書館の組織化が見出せる。一つは国家による組織化であり、もう一つは民衆による組織化である。とくに後者は奥泉報告(前号参照)の青年団による図書館づくりに象徴的に見られるように、国家的価値への対抗的価値の実現と、青年自身による図書館の自主運営権を主張している。そのことの歴史的意味を改めて評価検討する必要がある。

戦後の70年代以降の図書館づくりは、川島報告に見られるように、地域における

子育て環境の整備という地域(コミュニティー)形成への志向を強くもつものであった。そして文庫運動から市民による図書館づくり運動への発展過程に見られるように、この運動は日本の公共図書館を発展軌道に乗せる役割を果たした。

こうした二つの図書館づくり運動を検討する時、次のような課題が浮かび上がる。第1に図書館づくり(組織化)における公的(行政)セクターと市民的セクターの独自性と関係(対抗と共同)の問題であり、第2に図書館づくりとコミュニティー形成の関係の問題である。

発表2：図書館づくりと市民

川島恭子

(東村山市市民)

東村山市で図書館づくり運動をはじめた1970年ごろの東村山には、市民が利用できる施設も図書館も何もない状態だった。そんな中で石井桃子さんの『子どもの図書館』に魅せられ、講演会を開催したり、日本親子読書センターの学習会に参加したりして、自分の子どもにいい本を与えたいという思いを募らせてきた。そうした時に、公団から環境整備費が出るということがあり、その使い方を話し合う中から電車図書館が生まれた(1967年)。市に図書館設置を働きかける運動をはじめたころは『市民の図書館』も何も知らない状態だったし、私たちは運動に対しては実は消極的というか腰の重い集団だった。運動のきっかけは東京都の図書館振興政策が出されたことだった。私たちはその内容を知りたいと思い日比谷図書館に出かけた。そうしたところ日比谷の図書館員が私の自宅に振興政策の報告書をたくさん持ってきてくれたので驚いた。私たちはそれを教科書に勉強した。そのころもう一つ影響があったのが親子読書センターの夏期集会だった。ここで図書館界の新しい風を感じた。当時、図書館のことが運動になるとは多くの人は考えてなかったと思う。東村山ではPTAが動いてくれ、陳情署名運動が展開された。住民参加という点についてだが、当時東京都の市民参加の姿勢が話題になっていたが、東村山の市長も新住民が急増する中で、これまでの市政のやり方ではなく、新しいやり方を考えていたのだと思う。そういう状況の中で専門委員制度が議会で承認された。基本計画策定について市側は図書館建設から議論したい意向だったが、私たちは分館計画を考えていた。これが東村山の図書館計画のその後に大きな意味をもった。図書館設置後は、図書館協議会には文庫連絡会から委員が出るようになり、市長との懇談会も継続的に行われる慣習がつくられ、文庫関係者と図書館員と一緒に学習するというように、市民と行政と図書館の信頼・協力関係が作られていった。この信頼関係が、今回の図書館条例改正で、館長の司書資格を守ることに繋がったのだと思う。

天満隆之輔さんの思い出

田澤 恭二

(戸板女子短期大学)

天満隆之輔さんが、長い闘病生活の末、昨年12月19日に亡くなった。新年早々にそのニュースを知った私は、思っても見なかった事なので、大きなショックを受けた。この何年か、電話で話したり、手紙をやりとりしたりはしていたが、実際に会ったのは、数年前上京した彼と或る研究会で同席して食事を共にしたのが最後であった。これで日本の図書館界は、最後の戦中派とも言うべき、志ある硬骨の人を失った事になる。私個人も、最も信頼する旧友の1人と別れた事になり、心を分かち合える友が次第に失われる寂寞感に包まれている。とにかく、あの笑顔を二度と見る事が出来ないと思うと、実に淋しい。

私が天満さんに最初に会ったのは、1955年の春の事だった。当時上野にあった図書館職員養成所のBコース(大学、短大卒クラス)に入学した私は、Aコース(高校卒クラス)に年長の方が居ると聞いて、会いに行った。すると、カーキ色の旧日本陸軍の軍服を着た、眼のギョロリと大きな人が、教室に端然と座って居て、それが天満さんであった。その時の彼は、まるで少年少女たちに囲まれた豪傑のように私には見えた。早大専門部法律学科から学徒出陣した彼は、修業年限が半年ほど不足でBコースに入れず、Aコースへまわったのであった。(ついでに言えば、当時の養成所Aコースは、落ち零れの我々Bコースと違って、競争率10倍以上の難関を突破した秀才揃いであった。)

その後私は京都の立命館大学図書館に勤務し、天満さんは大阪学芸大学(現・大阪教育大学)図書館に入った。そして共に日本図書館研究会へ入会し、その月例研究会で絶えず顔を合わせるようになり、急速に親しくなった。当時の研究会は、分類と目録が主要テーマで、藤田善一・石塚栄二・森耕一・酒井忠志などの諸氏が中心メンバーであった。私の養成所同級生の坂本徹朗(阪大)・中嶋正夫(松下電器)なども常連参加者で、研究会よりもその後の呑み会と雑談が楽しかった。大阪市立図書館でランガナータンの講演を聞いたのも、この研究会の仲間が中心であった。

京都学芸大学図書館事務長だった大佐三四五氏を監修者に、アメリカの『教育資料の検索と活用』(アレグザンダー・バーグ共著)を、天満さんを含めて5人で共訳したのもこの頃であった。暑い夏休みに、京都学芸大学の宿泊所に全員で合宿して、ランニングシャツ一枚で訳稿の読み合わせや調整をしたのも、遙かな昔となってしまった。その6名の内、大佐氏はもちろん、谷山高美・埜上衛の両氏も既に鬼籍に入り、ここで天満さんを失って、残るのはついに坂本徹朗と私だけになった。私にとっては若気の過ちのような仕事であったが、天満さんも後年、「あの本、もっと丁寧に訳しておくべきだったなあ」と反省していた事がある。

天満さんの大阪教育大学図書館在職中の功績の一つに、現在も活動している「全国国立教育系大学附属図書館協議会」の結成がある。1968年に発足したこの協

議会の創設は、全く天満さんの提唱によるもので、当時東京学芸大学図書館に移っていた私も、その片棒をいくらか担いだ事になる。全国8校の旧学芸大学図書館職員の全国組織であるこの協議会は、館長・事務長などの管理職の会合だけでなく、係長・係員などの現場職員の研修と交流の場である研究部会を持つ点でユニークであった。天満さんの他、故伊藤数美氏・小野泰昭氏・山下信氏などの論客を揃えた大阪教育大学図書館は、協議会の最も活動的なメンバーであり、研究部会の会議の席上での、説き来り説き去るような天満さんの熱弁は印象的であった。

その後天満さんは、枚方市立図書館長になり、水を得た魚のように活動を始め、また、日図研の幹部としても『図書館界』の編集など多方面で活躍した。この時代については、他に語られる方が多いと思うが、『図書館界』の誌面についての私の取るに足らない提案を、彼が直ちに取り入れてくれた事を思い出す。何年かして、枚方の館長を辞して羽衣学園短大に移る頃、彼の姉上に当たる天満美智子津田塾大学学長の東京の家に滞在していると聞いて、訪ねて一日閑談した事もあった。図書館学教育者としてはまれな、大学図書館と公共図書館の両者の実務経験を持つ彼の教職就任を、私は大いに祝福したものである。

天満さんが一番親しんだのは、年齢も近い事から、やはり森耕一氏であったと思う。愛酒家の二人は、メートルが上がると論争から激論に至り、何回も絶交と和解を繰り返していたそうだ。「基敵は、憎さも憎し、懐かしき」のようなものであったのだろう。絶交した翌日森氏を主賓とする会合があり、その司会が天満さんの担当だった事もあったそうで、「あんなに気まずい思いをしたのは初めてだった」と笑っていた。森氏が亡くなった後、電話で天満さんがしみじみとした口調で「さびしいなあ」と言っていたのを思い出す。

その他、天満さんの業績としては、ガブリエル・ノーデの翻訳・研究や障害者の図書館利用問題の研究など多数あるが、忘れてはならないのは図書館評論誌『三角點』の刊行であろう。これは、伊藤昭治・前川恒雄両氏と天満さんの三人による同人誌であるが、その内容は公共図書館長経験者による貴重な論考であった。なお、私個人としては、地域誌『みのお』に天満さんが書いた高橋和己についての論文が忘れられない。彼の戦中派としての思想的立場を鮮明に現した立派な評論であった。

『図書館雑誌』に私が書いた大岡昇平著『レイテ戦記』紹介文に、ただ一人関心を示してくれた彼は、毎年敗戦記念日（8月15日）に、入営時の日章旗（そこには御両親・肉親・友人など27名の送別の辞が筆で書かれているという）を書斎に掲げる人でもあった。彼の軍隊体験を聞こうと思っていて、ついに聞きそびれたのは実に残念であった。今はただ、病苦から解放され、安らかに眠っている天満さんの冥福を、心から祈るだけである。

(2001.1.26)

2001年度第18回日本図書館文化史研究会研究集会及び総会
お知らせと発表者募集

前号でお知らせしましたように、標記の研究集会・総会は次の日程を予定しています。発表者を募集するとともに、多数のご参加をお願いいたします。

2001年9月8日（土）～9日（日） 於：京大会館

発表希望者は、論題（仮でも可）を事務局までご連絡ください。希望者の人数を把握して計画の枠組みを調整するため、3月15日（木）で一旦締め切らせていただきます。それ以降は個別にご相談ください。

オプションツアーについて

上記研究集会で入浴される各地の会員の方にお知らせします。事務局では、次のようなオプションツアーの企画を温めています。実現可能性や企画内容を検討する材料にしたいと思っておりますので、3月15日を目途にご意見をお寄せください。

集会の翌日9月10日は月曜日ですが、学校によってまだ夏休み期間中のところも多いと思います。せっかく京都へお越しいただくので、もう1泊していただきオプションツアーを実施しようかと考えています。

京都には、文化史的な観点から見て興味深い史跡も多数存在しています。それらを訪ねるツアーを考えてみませんか。清水寺・金閣寺などの単なる観光スポットではなく、また通常の図書館見学でもない、文化史的なオリジナルなツアーを組んでみましょう。例えば、伊東仁斎の古義堂の書庫、陽明文庫 etc. 普段は公開されていない所も研究会名で依頼すれば、受け入れてくれるかもしれません。

皆さんの訪れてみたいところを事務局までお知らせください。例えば、「自分は〇〇へ行ってみたい。実施されれば参加したい。」など。

反響の大きさにより、移動手段などを含めた実施規模を考える必要がありますので、よろしく願いいたします。

関東地区研究例会(2000年度第3回)

日時 3月17日（土）午後1：30～4：00

場所 法政大学大学院棟304号室

報告 奥泉和久『『市立図書館と其事業』をめぐって』

阪田蓉子「英国の最近の公共図書館事情」（仮題）

問い合わせ先：小川徹

会場案内図は、ニューズレター No. 69に掲載されています。お持ちでない方は、事務局にお問い合わせください。FAXまたは、郵送でお届けします。

原稿募集

- ◇ 『図書館文化史研究』 18号(2001年9月刊行予定)の原稿を募集します。原稿の締切は2001年3月31日です。投稿を予定される方は事務局までご一報ください。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。
- ◇ 「ニューズレター」の原稿を募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。(できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を)事務局(石井)あてお送りください。

新入会員

事務局から

今回、会員名簿を作成し同封しました。データは原則としてご本人から届けられたものを入力していますが、一部他の図書館関係団体の名簿を参照して修正したデータもあり、必ずしも統一的な方針が一貫して適応されている訳ではありません。不都合がございましたらお手数ですが、事務局までお知らせください。また、変更後の訂正漏れや、入力ミスもあると思われます。ご自分のデータについて間違いがございましたら、同じく事務局までご一報願います。

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三